

平成26年度研究協議会資料

都道府県・ 指定都市番号	13	都道府県・ 指定都市名	東京都	研究課題番号・校種名	1 幼稚園
研究課題	幼稚園教育要領第2章に示す領域のねらいの実現状況及び課題等を把握し、その趣旨等を実現するための教育課程の編成、指導方法等の工夫改善に関する実践研究				
ふりがな 幼稚園 (園児数)	私立 板橋富士見幼稚園 (169人)				
所在地 (電話番号)	〒174-0054 東京都板橋区宮本町 29 番 1 号 (03-3965-7001)				
研究内容等掲載ウェブサイト URL	http://homepage2.nifty.com/itabashi-fujimi/				
研究のキーワード	教育課程 自然 環境 人との関わり 伝え合う喜び				
研究成果のポイント	<p>本研究では、5領域におけるねらいの実現状況について把握すると共に、幼児の環境に対する応答性について調査した。その結果、常に主体的に関わることの出来る本園の自然環境が身近にある中で、遊びや学びについて、好奇心や探究心をもって自ら仲間と共に協同しようとする姿が見られた。特に環境に対して柔軟な心で接し、して欲しいことやしたいこと等を、教師や友達に提案する姿が見られた。また、仲間と共に心を通わせて、感動や喜び、悔しさ、哀しさ、もどかしさなどを感じながら葛藤して向き合う様々な経験や、やりたいことが実現出来る環境が保障されていることがわかった。しかし、クラス全体からの育ちを捉えると、環境に対する応答性の弱い幼児の姿も見られることから、今後の環境のあり方についても再検討する必要がある。</p>				

1 研究主題等

(1) 研究主題

教育要領実現状況の中で「さまざまな体験を通して、好奇心や探究心を培い、伝え合う喜びや人と関わる力が育つ為の環境の在り方を考える。」

(2) 研究主題設定の理由

最近、幼児の遊びや学びの活動に接していると、十分に思いを伝え合い楽しさを実感している機会が少なくなったように感じる。そのため感情を言語化し、遊びを仲間と一緒に協同して継続していく力や深め合っていく力が衰退してきているのではないかと考えている。そこで、本園の自然な環境を通して、一人一人が、自己を調整しながら他児の気持ちを受け止め、自己の考えやして欲しいことなどを伝え合えるようになるためには、どのような環境の構成が求められるのかについて検討することとした。

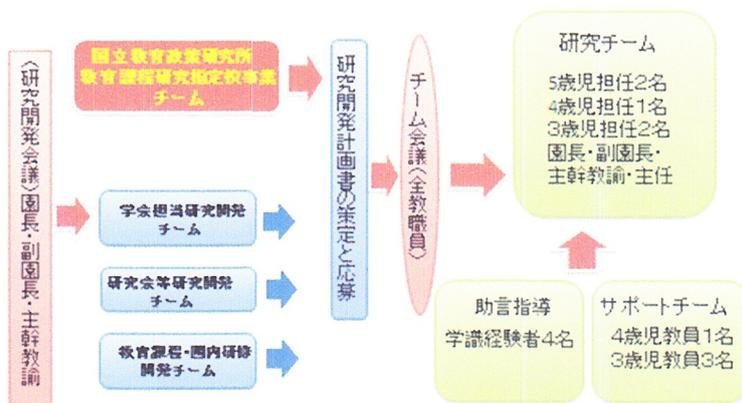
(3) 研究体制

- ・3月研究プロジェクトを立ち上げ、平成26年度教育研究課題の設定を行った。
- ・4月国立教育政策研究所教育課程研究指定校事業応募による指定を受け研究開発に着手した。
- ・6月及び11月期の5歳児2クラスより抽出した、対象児2名の行動記録を学級担任及び主幹教

論等により行う。本記録の読み取りの信頼度を高めるため、サポートチームを編成し、研究チームとの連携を行った。資料整理に当たり、本園の学識経験者からの助言指導を受けながら、研究計画に沿った目的が明確化できるよう毎月一回以上の開発会議を実施した。

研究プロジェクト体制

板橋富士見幼稚園研究開発チーム



(4) 1年間の主な取組

平成 26 年 度	応募・指定	
	第一回開発会議	4月 研究内容の提示と組織承認（全教員）
	第1回目調査	6月 第2週 5歳抽出児2名のエピソード記録（調査票A）・日々の記録の読み取り（調査票B）の作成
	7月	国立教育政策研究所担当官訪問指導 記録助言 調査票A・B 記録整理、5領域の総括票（調査票C）の検討（全教員と識者）
	第二回開発会議	7月 調査票B・Cの記録整理、識者助言指導（全教員）
	第三回開発会議	9月 調査票Cの記録整理（担当者）
	第四回開発会議	10月 第二回調査検討（全教員）
	第2回目調査	11月 第2週 5歳抽出児2名の調査票A・Bの作成
	第五回開発会議	11月 調査票A・B・C記録整理（全教員）
	第六回開発会議	11月 調査票B・C 読み取り表1-1～5記録整理（全教員）
第七回開発会議	12月 調査票C・読み取り表1-1～5記録整理、識者助言指導（全教員）	
第八回開発会議	12月 提出資料検討（担当者）	
第九回開発会議	1月 発表資料作成（全教員・識者）	
第十回開発会議	1月 園内発表の検討（全教員）	

2 研究内容及び具体的な研究活動

(1) 研究内容

【研究内容】幼稚園教育要領の実現状況を把握すると共に、好奇心や探究心を培い、伝え合う喜びや人と関わる力が育つ為の環境構成の在り方について検討することを目的とする。

【研究方法】平成26年6月期及び11月期において、5歳児2名を対象に幼児の日々の生活する姿を手記記録し、【調査票A・B・C】を作成する。作成した調査票を基に【5領域のねらいごとの読み取り表1-1～5】及び教育課程の編成や実施の状況【調査票D-1】幼

幼稚園教育要領の定めるねらいの実現状況【調査票 D-2】を作成する。

【具体的手だて】手記記録を実施する際に、幼児のありのままの姿が記録できるよう、学級担任が記録する。なお、記録の観点として、幼児の内面の心の揺れ動きや葛藤する場面、その後の発達に影響すると思われる姿や場面を言動や行動から読み取るよう心がけた。

(2) 具体的な研究活動

本研究を進めるに当たり全教員に対して、本園の取り組むべき課題と研究概要について説明を行った。調査研究に当たり、主幹教諭を研究責任者として、幼稚園教育要領実現状況と「様々な体験を通して、好奇心や探究心を培い伝え合う喜びや人と関わる力が育つ為の環境の在り方」について研究を進めることとした。

調査は、平成 26 年 6 月と 11 月期の二回、五歳児 2 学級からそれぞれ男女 2 名を抽出し対象児とした。対象児について一週間程度の記録を行った。記録に当たっては、幼児の言動に視点を置き、①今までのその子の生活を振り返り、顕著な発達の変化が見られた場面、②今後の成長に変化が期待できる姿、③仲間とのかかわりや、その子の内面の揺れ動きなどの視点でなるべく具体的に記録していくこととした。

そこで、研究の進め方として、日々の記録を基に、幼児の言動を読み取り、さらにそれらを 5 領域の視点から捉え、ねらいに照らし合わせて分類整理することとした。

例えば、対象児 K 児の 11 月のエピソードでは、「朝一番で外遊びに出た K 児は、靴を履くと真っ先に登り棒に行き『ハンターごっこやりたい人』と呼びかけた。6 人が集まりハンターを決めることとなった。『ハンターやりたい人』と言うと、K 児を含む 5 人がやりたいと手を上げた。R 児が『これじゃ、ハンターが多すぎるよ』というのを聞いた K 児は、『じゃ、僕が譲るよ』とすぐ言い、逃走者になることを決めた。……途中で K 児がバリアありにしようといみんなに提案し、他児もそれを受け入れて、また遊びが続いた。」と記録されている。

この記録から、

1. 友達と誘い合ってハンターごっこを始める。
2. ハンターごっこに必要な人数を集めようとみんなに呼びかける。
3. 集まったメンバーの中で、みんなの状況を考えて、自分の役割を見つめることができる。
4. 友達に自分の知っている「逃走中」の知識を相手にわかる言葉で伝える。
5. 友達に意見を伝えたり、相手の意見を受け入れたりしながらルールを作って遊ぶ。
6. 自分の提案した、「バリアあり」というルールをわかりやすくする為に、落ち葉をカードに見立てる。
7. ハンターごっこの遊びを通して自ら進んで身体を動かす心地良さを感じる。

と学級担任は読み取った。その読み取りから、サポートチームの教員が参加して、5 領域の視点から分類したところ、領域「健康」には 7 を、「人間関係」には、1.3.5 を、そして「言葉」には、2.4 を、「環境」には 6 の姿と捉えられた。そして、さらに 5 領域のねらいの心情・意欲・態度にそれぞれの読み取りを分類した。

その後、幼稚園教育要領解説を参考に全教員で、ねらいの内容になっているかについて、識者を交えて一つ一つ検討し、幼稚園教育要領の実現状況を把握した。こうした事例を、開発会議で学級担任だけの読み取りだけではなく、サポートチームとカンファレンスすることによって、より確か

な5領域の心情・意欲・態度の側面から読み解きが出来るとともに、その時の環境を介しての幼児の言動や、心の揺れ動きについて、環境をどのように構成する必要があるかについても、6月と11月を比較しながら、一人一人の幼児の成長過程や教育課程の実現状況・環境構成の在り方などが具体的に見えてきた。

3 研究の成果と課題

(1) 成果

本調査において、幼児が常に主体的に関われる自然環境が身近にある中で、様々な言動や行動から、内面の心の揺れ動きや葛藤する姿を読み取ることができた。

幼児は、遊びや学びについて、好奇心や探究心をもって自ら仲間と共に協同しようとする姿が見られると共に、環境に対して柔軟な心で接し、して欲しいことやしたいこと等を、教師や友達に提案する姿が見られた。また、仲間とともに心を通わせて、感動や喜び、悔しさ、哀しさ、もどかしさなどを感じながら葛藤して向き合う様々な経験や、やりたいことが実現出来る環境が保障されていることが、分析から明らかになった。生活の中から興味を持ったことを広げて、活動と活動を繋げいくことが大切であることと同時に、見通しを持った計画的で意図的な指導のあり方の重要性について認識した。

(2) 課題

本研究において、幼児が様々な経験を通して、好奇心や探究心を培い、伝え合う喜びや人と関わる力が養われる為には、本園の特色である自然環境での応答的関わりが重要であることが示唆されたが、室内環境及び屋外環境の十分な活用が活かされていないことも明らかになった。特に、表現活動での取り組みにおいて時期にもよるが、今回の読み取りにおいて、その経験や体験が不足していることが明らかになった。そのため、今後の課題として、特に音楽関係の表現活動において教育課程及び指導計画の作成を見直す必要がある。また、日々の保育において、幼児の内面の心の揺れ動きを捉える視点を持つことが重要になることから、日々幼児と生活を共にする中で、新たな可能性を広げる遊びの援助と、生活を豊かに展開できるような指導をしていくことが必要である。

(3) 指定期間終了後の取組

本研究と並行して、3歳児4名、4歳児2名の対象児についても同様の研究調査を実施している。本研究で明らかになった5歳児の生活の実態から、育ちの背景となる発達過程をより深く見ていくために、3歳児、4歳児のねらいの実現状況を把握することで、各学年のより具体的な指導の在り方を捉えることができる。それには段階的な幼児の成長と発達を促す環境構成の在り方を追研していくことが重要であり、本研究の成果について、関係機関で発表したり、本園ホームページで公表したりするなど、幼児教育関係への情報公開と教育推進に努めて行きたい。